

第六号：第二十九首～第五十四首

まず、第六号 29 から 54 までをまとめてみたい。

「今までになかったような事ばかりを説いて、万事をたすける『つとめ』を教える。

まず、この『つとめ』を勤める十人の中には、元々人間を産み育てた原父母にあたる者がいる。すなわち、親神は人間と世界を創めるとき、最初に『いぎなぎのみこと』と『いぎなみのみこと』とを引き寄せて、それらの者に人間を創める働きを教えた。つまり、親神はこの世界の始まりにおいて、泥海の中にいた『うを』(魚、『を』は旧字)と『み』(巳、蛇)とを引き出して、それらを『いぎなぎのみこと』と『いぎなみのみこと』としてまず“夫婦”を拵えたのである(29～32)。

そう、この世の元々の始まりは泥の海であり、その中には泥鰯ばかりであった。その中に一風変わった『うを』と『み』とがあり、その者たちをよく見澄ましてみるとこれから創ろうとしていた人間の顔をしていたので、それを見て親神は『よし、それでは人間を創めよう』と思い立った。それは、単なる思いつきなどではなく心底からそう思ったのである(33～35)。

それから親神は、この者たちを雛形としてさらに必要な道具を寄せて、それらに順々と人間というものを成り立たせる働きを教えようと人間創造の段取りを考え始めた。その道具というのは『くにさづちのみこと』と『月よみのみこと』とで、まずこれらを人間の身の内に仕込み、それから『くもよみのみこと』『かしこねのみこと』『ふとのべのみこと』そして『たいしよく天のみこと』と寄せ集めれば必要な道具も揃うだろうから、そこまで段取りがつけば確かに人間と世界を創めようと親神の考えがまとまったのである。それは、親神(月日)そのものを表す『くにとこたちのみこと』と『をもたりのみこと』との間で相談がついたともいえよう。いずれにしても、それからの親神の働きというものは実に並大抵なことではなかったのである(36～40)。

さて、今こうして色々と言っているが、今までにないような事を創めるのであるから、何を言うにしても伝えるのが実に難しい。この世界を創めだした真実を知っている者は誰もいないだろう。しかし、これからはどのような事も順々と説いて聞かせるから、それを嘘とは必ず思うな(41～43)。

人間を創めだしたというのは、先にも述べたが、まず泥海の中で『うを』と『み』とを夫婦にすべく引き寄せて、それぞれに人間を生み出す“種”と“苗代”の役割を担わせた。それから、この者たちの体内に月日(＝親神)が入り込んで、順々と人間を創る働きを教えていったのである。子どもの数は九億九万九千九百九十九人であり、これだけの子どもを母親の胎内に三日三晩かかって宿して、母親はそのままその場所に三年三月の間とどまっていた。やがて生まれ出した子どもは五分ほどの大きさであったが、それから五分五分と成人していった。それらは三寸まで成人したとき皆出直したのであるが、親神が一度教えておいた働きによって母親の胎内には再び子どもが宿り、さらに出直しを繰り返して、計三度宿ったのである(44～49)。

こうして説けば分かるように、この世の真実の神は月日(＝親神)であり、あとはすべて人間を創るために引き寄せて使った道具である。それらの道具には『くにさづちのみこと』など

の神名を授けたが、なかでも人間の雛形とした『いぎなぎのみこと』と『いぎなみのみこと』とは第一の神(の働き)であり、これは神道に見立てると天照皇太神宮(伊勢神宮)のようなものである。また今後も何かにつけてだんだんと説いていくが、その話は今までに誰も知らないような事ばかりであって、これから先どんなことを説いても、すべて人間を創めたことに関わることばかりを伝えていく(50～54)。」

第六号のこの箇所はいわゆる「元初まりの話」の原型であり、人間と世界の根元を明らかにして、今日の世界が陽気な世界へと生まれ変わっていくための根拠を示している。それは、何も難しい話ではない。世界中の人間がすべて親神の子どもであり、互いにきょうだいであることを伝えているのだ。

ただし、それだけの主張ならば、わざわざ天理教でなくとも、他の宗教や教えでも示しているところであろう。むしろ、そのような主張は陳腐だといえるかもしれない。しかし、我が身を振り返って、実際、私たちはそれを本当に納得して日々を暮らしているであろうか。それを「陳腐だ」として受け流す態度は、本心では周りの人々を「きょうだい」として受け入れたくないのではないか。

そこで、「おふでさき」はただそう主張するのではなく、人間が互いにきょうだいであることを心底納得できるように、私たちが誰によって、どのような思いで、どのような仕方でも生み出されてきたのかを詳しく教えようとしている。そのまとまった記述が第六号のこの箇所である。しかも、「何を言うにしても伝えるのが実に難しい」「嘘とは必ず思うな」と緊張感をもって心底伝えたい本心を吐露されている。

そして、教祖は「おふでさき」に記されたのみならず、生活すべてを通してその親心を懇切丁寧な伝えられ、私たちが実際にきょうだいとして暮らせるように一緒に時間を持って下さった。しかも、そのお働きは御身を隠された後も今なお続いている。

私たちが互いに関わり合う中でしか生を営めないことは、人生の根っこにある真実である。たとえ自分のものを他人に分けたくなくとも、その「自分のもの」がすでにみんなで分け合っているものである。例えば水のように。しかし、それでも、私はついそれを「自分のもの」としている。「自分に分け与えられた水」ではなく「自分の水」と思って飲んでいる。今着ている服も、何の疑いもなく「自分の服」として着ている。そうして人生の根元を見失っていくから、咲くべき花も咲かないのであろう。それが道理である。根元にもとづいた理、すなわち、元の理である。

そこで、教祖は人生の根っこを忘れないように「おふでさき」にその元の理を記された。第13号では端的に「世界中の人間は皆きょうだいである。他人というものは無い」(43)と詠われ、続けて「この元の理を知っている者がいないのが、親神としては残念でならない」(44)と論がされている。そして、そのような人間をたすけてやりたいと自ら根元から歩んで見せて、私たちに人生には根があることを教えて下されているのだ。元の理は、教祖の御心を手本として日々を暮らす中に心に治めることができるといえよう。